

## 地域医療の現場から

● 101

近年、子宮頸がんの若年化が進んでおり、20〜30代で発生するケースが増加しています。子宮頸がんは一定の時間をかけて徐々に進行しますので、定期的に検査を受けていれば早期発見が可能です。

婦人科外来を受診するのに抵抗を感じたり、面倒くさいと思う方が多いと思います。しかし、早期発見や初期治療がでなかつたことで病変が進んでしまうと、より大きい手術や長期間の治療となり、精神的・身体的負担が非常に増えてきます。

婦人科の一般的な外来検査には主に、①子宮がん検査②超音波検査があります。

①いわゆる子宮がん検査とは子宮頸がん細胞診のことであり、子宮の入口にある子宮頸部の粘膜細胞をブラシやヘラでこすり、顕微鏡で調べる検査です。初期や前がん状態で見つければ、負担の少ない小手術で治療が期待できます。特に妊娠を希望される方は早

1度、自治体から通知が来ます。公費で安く受けられるので、各自治体のホームページや広報紙で確認して受診するのが好ましいです。職場検診や人間ドックでも検査は可能ですので、受診しやすい方法を選択して頂ければと思います。

## 子宮頸がん検査は「今のうち」に！

い段階で見つければ、子宮の一部を切除する小手術で済み、その後の妊娠・分娩が可能となります。検査によって起こる出血や痛みは軽度です。子宮頸がん細胞診検査は20才以上の女性を対象に2年に

もう1つの子宮がん検査に子宮体がん検査があります。子宮の奥にある子宮内膜の異常を調べる検査で、細い棒状のブラシを子宮内に挿入して内膜細胞をこすり、顕微鏡で調べます。多少の痛みや出血を伴うことがあります。40代以上で不正出血のある方は検査を

受けられるのが望ましいです。②超音波検査は子宮筋腫・卵巣腫瘍など、子宮と卵巣にできる病変を詳しく確認できる検査です。特に卵巣腫瘍はある程度大きくなったり、進行しないと痛みや圧迫症状が出ない沈黙の臓器の1つです。通常、公費で行う子宮頸がん検査には入っていませんが、婦人科受診時に一緒に追加されるのが好ましい検査の1つです。

このように婦人科疾患は初期の場合、自覚症状がほとんどありません。病変が進行して、出血や下腹部痛など症状が出てからの受診では遅いことがあります。ぜひ今のうち、自治体の割安に検査できるサポートシステム等を活用し、婦人科検診をお勧め致します。

セコメディック病院  
婦人科

立花 聡司